



AVIAN FLU: Are we ready?

鳥インフルエンザ：備えはOK？

Nature Vol.435(399)/26 May 2005

Peter Aldhous and Sarah Tomlin

P. BRONSTEIN/GETTY IMAGES

東南アジアでやっかいな問題が起こっている。高病原性の鳥インフルエンザが風土病となっているのだ。何百万羽もの鶏が処分されたが、アヒルと野生の鳥が持続的な病原体保有宿主となっている。H5N1 ウイルスを根絶することはできないだろう。そして、人に感染する可能性は、H5N1 ウイルスが出現するたびに。H5N1 ウイルスはまず、1997年に香港と中国南部で発生し、6人が死亡した。2003年後半以降、ベトナム、タイ、カンボジアで50人を超える人が死亡した。

人間に感染する新型インフルエンザが世界的に流行する舞台は整っている。通常は鳥が感染する、ほとんどの人が免疫を持っていないウイルス株が、人から人へ簡単に感染する能力を獲得したとき、世界的流行は起きる。H5N1 ウイルスは、まだその能力を手にしていない。うまくいけば、そうならずすむかもしれない。

しかし、もしウイルスが人から人へ感染する能力を獲得すれば、数か月間で地球全体に広がる可能性がある。その結果を予測することはむずかしい。1968年、比較的穏やかな H3N2 ウイルスの流行により世界で

約75万人が死亡したが、この程度の被害ですむとは考えにくい。真の悪夢のシナリオは、1918年のH1N1インフルエンザの世界的流行が再現されることだ。このとき、世界で4000万人の人が死亡した。今、世界の衛生状態は当時よりずっと改善されており、その効果はあるはずだ。しかし、世界的に流行する株が、もしも現在のH5N1ウイルスが示しているきわめて高い病原性をもっていたら、1918年と同程度の数の犠牲者が出ることもありえないことではない。

Nature 2005年5月26日号は、特集(News Feature)と論評(Commentary)のページを、鳥インフルエンザの危険性とそれに対処するための準備がどれだけできているかの詳細な考察にあてた。*Nature*の記者たちは、世界的流行を引き起こす株に対するワクチンの各国の生産能力と、抗ウイルス薬の世界的備蓄が適切かを検討している。その報告は深刻な状況を伝えている。

国際社会は世界的流行の脅威に対する準備ができていないと、繰り返し警告されてきた。しかし、その警告は真剣に受け止められてこなかった。このため、私たちは特集の冒頭で、フィクションを使って問題のあ

りのままの姿を浮き彫りにすることにする。具体的には、騒動のまっただ中にいる1人の架空のジャーナリストのブログという形で近い将来の世界的流行のようすを描く。これはフィクションだが、単なる空想ではない。そのプロットは、実際に明日にもウイルスの蔓延と闘うことになるかもしれない専門家の助言を得て練られた。

論評の欄では、このむずかしい問題と取り組んでいる専門家たち5人の意見を取りあげている。その中から *Nature Digest* では、ロックフェラー大学の David Ho による論評を紹介する。彼は、2003年のSARS(重症急性呼吸器症候群)発生の経験をふまえ、中国は新しい微生物の脅威にうまく対処できるようになったのか、あるいはそうとはいえないのかを検討している。

もし私たちが幸運なら、こうした *Nature* からのメッセージを理解してもらう時間はまだ残っているのかもしれない。世界の指導者たちが、この警告を真しに受け止めてくれることを願う。 ■

Peter Aldhous は、*Nature* のニュースと特集担当のチーフエディター。

Sarah Tomlin は、論評担当のエディター。